

# 高齢社会における人とペットの暮らしに関する研究

## Research on People and Pet Life in the Aging Society

### ■ 季雨潔 Yujie Ji

愛知県立芸術大学大学院 本田敬研究室

Aichi University of the Arts

### ■ キーワード：高齢化、ペット用品、犬用品

#### はじめに

近年、少子高齢社会を迎え、ペットと高齢者の暮らしについて関心が高まっている。高齢者とペットが触れ合うことで「健康によい効果を与える」、「孤独感や不安感が解消」などペットを飼うことは心身共に良い効果がある。しかし、ペットを飼いたくても、年を取って体力が衰えるにつれて世話する負担が増えるのも現実だ。

一般社団法人ペットフード協会「全国犬猫飼育実態調査(2019)」によると、高齢世代の多くがペットを飼っていることは明らかだ。その一方、NPO法人「人と動物の共生センター」の報告によると、飼育放棄する飼い主の中、半数以上が60代以上高齢者という結果になっている。飼い主の死亡だけでなく、健康であっても徐々に体力が落ちていくため、小さなきっかけでも飼育放棄になるという問題が浮かび上がってきた(図1)。

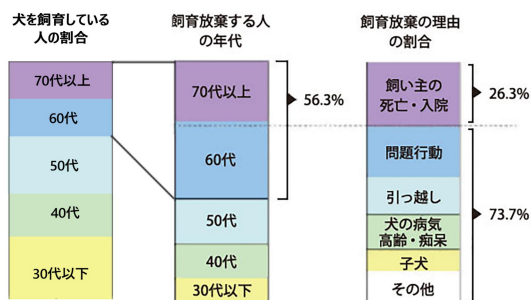


図1 飼育放棄の理由と年代別の割合

近年、ペットと同居できる老人ホームや高齢者向け住宅が増えてきた。高齢者の自宅に動物看護師などを定期的に派遣したり、高齢者が身体的に大変な時期になっても、ペットと一緒に安心して暮らせるサービスも充実してきた。

このように高齢化社会におけるペットにまつわる課題に対し、さまざまな対策が試みられている。

こうした現状を踏まえ、本研究は高齢者に向けたペットの世話を支援するプロダクトデザインの開発を目指す。

#### 1. 研究対象の決定

高齢者の身体機能の低下は様々だ。足腰、骨の痛み、筋肉・体力の衰えのせいで散歩の時間や回数が減少したり、転倒の不安があつて外へ散歩することをためらったりする。記憶力や判断力に障害が起こるので、エサやりを忘れて、ペットの病気に気づけなかったりなど、犬の世話に支障が出る可能性が高い。

犬は一日一定の運動量が必要なので、犬の散歩がきつかけとなって周囲の人との会話が生まれることもある。これはほかのペットと比べて特徴的なメリットと言えるだろう。小型犬は運動量が少なくても良く、高齢者でも十分な運動量を保つことができる。

以上より、本研究では衰弱期の高齢者と小型犬をターゲットとした。

#### 2. 研究の現状

既存の犬と高齢者に関する研究では、欧米を中心に、ペットセラピーやペットが高齢者の健康に及ぼす影響についての研究が数多く行われている。しかし、首輪やリード、食器や水やり器など、現在流通しているペット用品は、高齢者にとって身体的、精神的な理由から使いづらいことも多い。

例としては、ペット食器(図2)はたいてい床に置かれるので、腰を曲げたり、しゃがんだりしてかなりの苦勞している人がいるだろう。また、スマホのアプリで餌の量や時間を設定するような自動給餌機(図3)などは、デジタルデバイスが苦手なために使えない高齢者が多く存在している。だからこそ、高齢者に特化したニーズを考えながら、プロダクトデザインの研究開発を進めることが重要となる。



図2 ペット用食器



図3 犬猫用自動給餌機

#### 4.アイデア展開

研究は、在宅と外出の二つのパターンを想定して進めていった。

在宅の場合、必要性和頻度によって犬の世話をする際の問題点解決できる道具やデバイスを発想した(図4)。

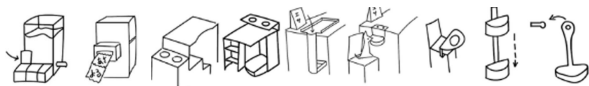


図4 アイデアスケッチ(一部)

外出の場合、犬が人間関係の形成に及ぼす影響に着目し、公園、集会センター、街道などのパブリックスペースでコミュニケーションを活発化させ、心理的に満足することを目標とした(図5)。



図5 アイデアスケッチ(一部)

アイデアの可能性を検討した結果、えさやりチェック機能付きの犬の食事用椅子に絞った(図6)。この椅子だと、高齢者が腰を曲げないで簡単にえさやりを実現することが可能だ。犬が椅子に上ることで、家族として一緒に食事を楽しむことができるようになる。



図6 アイデアスケッチ

#### 5.リサーチの実施

##### 5.1 インタビュー調査

犬用品の使用経験や購入先、消費水準、家族構成というユーザーの実態や意識について知るため、「使ってみたい人がどのぐらいがいるのか」を尋ねながら、ストリートインタビューで情報を収集した。調査エリアは名古屋市中東区の公園を設定し、年齢層は50代以上、小型犬の散歩をしている人をモニターとした。下記の設問はその一部である。

- ・購入希望の犬用品、犬用の家具は何か。
- ・犬の世話で悩んでいることは何か。
- ・持っている犬の食器の種類と使い方はどうか。(素材、置くところ、不満点)。

・犬に使う費用1ヶ月はどのぐらいか。

12人のサンプル数で実施し、「エサは缶詰で混ぜる。手が汚れるし、皿を洗うのも面倒だから」「皿が倒れて割れた」「犬はよく皿をほかのところに持って行く」などの意見があった。

ただし、今回のコロナ禍における調査ではインタビュー時間を短くせざるを得なかったため、込み入った質問はできず、提案への評価が曖昧で、答えがぼやけているなどのデメリットが出た。

##### 5.2 アンケート調査

改善方法として、アイデアに対する欲求度や好感度を測るため、サンプル数を66人に拡大し、オンラインでアンケート調査を行った。

意図をより理解してもらえるように、イメージ図をアンケート用紙に添付した(図7)。それに対し点数をつけてもらった結果、20人が3点(一般)、5人が4点(好き)、7人が5点(とても好き)と評価した。



図7 提案のイメージ

1から3まで(「非常に嫌い」から点数「普通」)を付けた対象者の声では、「階段が危なそう」「高いところから犬が落ちそうで心配する」という安全面に対する不安が一番の理由だった。デザインする上で、犬の安全を確保することが重要であることが判明した一方、飼い主の安全面への不安が減れば、点数評価が上がると考えられた。よって、提案の可能性はあると判断した。

また、調査に協力した66人のうち、一日のえさやり回数が三回以下の方は59人だった。エサの皿を置く場所は、「部屋の隅」「ダイニングテーブルの隣」「ベランダ」「キッチン」という答えが多数を占めた。これらのデータにより、アイデアを具現化するため具体的な参考を得ることができた。

#### 6.実験の展開

家庭のリビングスペースで、小型犬の実際の体重を考えながら、適した階段の角度や幅を明確するため、階段と座り面部分の検証をした。

最初は、階段の幅を120mm、高さを130mmを設定し、段ボールで簡易モデルを製作した(図8)。



図8 簡易段ボールモデルと実験中写真(一部)

犬を登らせた結果、階段の幅が狭く、座面の高さが不安を与え、段ボールの材質を怖がるなどの問題が発見された。したがって、より安定する木の素材を選んで幅 125mmと 150mm 二、三個目の階段モデルを作った(図 9)。

しかし、公園環境での実験は何回も失敗した。犬があまり知らない環境の中で、見知らぬ人と物体に影響されたことが原因と考えられる。よって環境を家の中に変更すると、実験は成功した。この結果に基づいて、階段の高さや幅、座面の面積、椅子の総高さなど具体的な寸法を決定した。

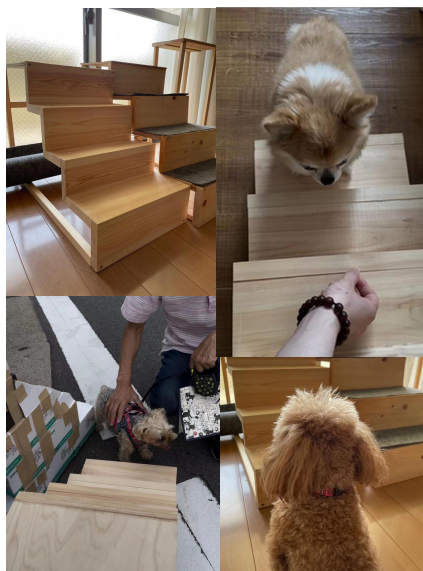


図 9 木製モデルと実験中写真(一部)

## 6. 外観の考察と展開

人や犬が快適に使える機能性から形状を考え、スケッチを行った。椅子の構造としては、X字ミックス式、A字型、足分離式、上下分離式、階段分離式の五種類に分けられている(図 10)。



図 10 アイデアスケッチ(一部)

アンケート調査では、ユーザーの基本属性とし、家族数、住居の種類、部屋の間取りがそれぞれ、椅子の向きを変更することは不可欠な機能と言う。この考察から、その中から三種類を選んで3Dモデルを作って検討した(図 11)。

上下分離式では全体的重い、上部分が方向変更できるタイプである。階段の部分をダイニングテーブルの下に移動して収納するという考えもある。階段分離式はテーブルのパーツが取り外せ、自由に設置できる。金属を想定して面より線で構成するタイプなので印象的軽く、体量感が少ない。しかし、階段の隙間が不安なイメージを与える。X字ミックス

型は折りたたみ式で、使用しないときは折りたたみ収納ができることで、テーブルがフェンスの三向きで設置できる。このような構造で展開していった。

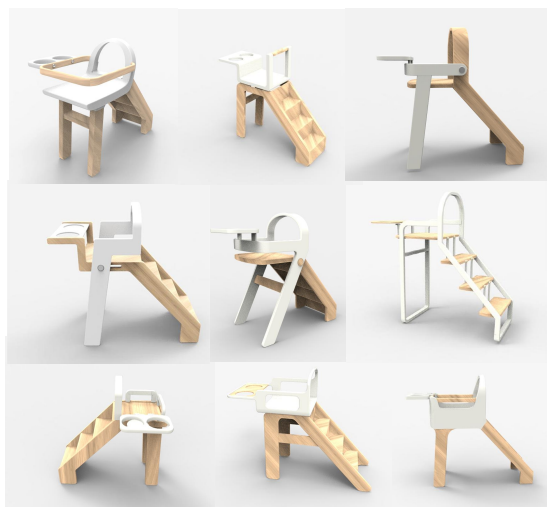


図 11 外観の展開(一部)

## 7. 試作の検討

造型を決定した上、各部の比例、全体的なボリューム感を見るため実寸のモデルを製作した(図 12)。強度を持つしながら最大限度体重を軽減するを目標とした。主にフェンスと前足の寸法を再討した。



図 12 実寸モデルの製作

## 8. 修了製作

そのまま放置しても、折りたたんでもスッキリした造型にした(図 13)。一体式の構成で、簡単に組み立てる可能となる。底面のネジを外して、片手で折り畳むことができる。小さな子どもが来たときや大掃除のときなど、色々な場面に対応しやすい。一方、運ぶ際も省スペースなのでメリットとなる。



図 13 折り畳み式

ユーザーの利便性を考慮し、ダイニングスペースに合わせてテーブルの位置が前と横に変更可能で、自由度が高い(図 14)。



図 14 向き変更の例



図 15 テーブルと皿

テーブルのトップに数字を付け、皿を置くと、矢印のような持ち手がえさやりの回数を指すことで、何回目のえさやりか分かりやすくした。持ち手の底面に小さい出っ張りをつけ、テーブル上で皿が動かないようにしている。誤操作も避けられる(図 15)。

エサの皿は重みがある陶器を想定していた。耐久性が高く、質感がよく見た目が美しい。水の皿は残量がわかりやすいガラスにした。二皿の位置が高低差を作り、エサが水に入れってしまう問題を解決できる。

テーブルを斜めにする理由は二つある。まずエサが座面の方に溜まって犬が食べやすい。次に最も重要なのは、犬の首にサポートできる15度にする事だ。犬の負担を少しでも軽くする(図 16)。



図 16 傾斜のテーブル

飼い主の横まで来い、あるいは向かいに座って目を合わせながら美味しいご飯を食う、犬に対しても幸せの思いが作れるだろう(図 17)。



図 17 MEIT

この作品を「MEIT」と名称を付けた。MEとITの組み合わせ

で「メイト」と読む。高齢者とその犬に限らず、人間と動物の関係は親密な仲間のというさらに一層の意味があるからだ。

## 9.終わりに

高齢化を深刻していた昨今、高齢者にとってペットと暮らす価値は「かわいいから好き」という幸せ気分はもちろんだが、ペットの世話をすることで、「自分を必要としてくれる誰がいる」という心理的な満足を得ることも重要ではないだろうか。今回の研究をベースに、高齢者とペットの関係にさらに注目し、両方の視点からデザイン研究開発しながら、暮らしやすい生活環境を作っていきたい。

## 注、引用

- 1) 奥田順之,ほか、「犬の飼育放棄問題に関する調査から考察した飼育放棄の背景と対策」、NPO 法人「人と動物の共生センター」、2013年、p5

## 他参考文献

- ・ 一般社団法人 ペットフード協会、「全国犬猫飼育実態調査」、2019年
- ・ 荒川弘之、「犬がきっかけで生まれる高齢者と社会の繋がり」<<https://kaigo.homes.co.jp/tayorini/interview/arakawa/>> (2019/12/11)